

高山掃部長者伝説焼米出土遺跡

板 橋 源

A Historical Site Rich in Baked Rice-Legendary

Residence of a Millionaire, Takayama Kamon-

GEN ITABASHI

I 遺 跡 に 関 す る 所 伝

(1) ま え が き

岩手県水沢市佐倉河^{さくらがわ}の満倉^{みつくら}の上幅^{うわはば}高山^{かもん}に掃部長者譚が伝承されている。今回調査した遺跡に関する所伝というのは、掃部長者伝説のことである。この伝説の詳細な内容は南部叢書第9冊所収の「奥州胆沢高山実伝」にみえているし、その概要については大槻文彦博士が明治34年の「考古界」(1の3)において世にひろく紹介し、次いで大正3年の「郷土研究」(2の12)にも紹介され、昭和7年には日本民俗研究会編の「民俗資料類纂第2」にも収められたので、いよいよひろく知られるようになった。

最も詳しく内容を伝えている「奥州胆沢高山実伝」については、その著作年代も筆書年代もそして筆著者の名も惜しいことには全く不明である。わずかに南部叢書の解題に「文体から推すとこれもやはり奥の座頭などがわびしくて静かなる民間に昔の栄華を応酬(板橋言、善根を積めば栄え悪業の果てには没落するという仏神の因果応報の意味)の霊験とともにゆるやかな口拍子を以て語り伝へたものではなかろうか」と、その来歴について一見解をのべている程度しかわかつていない。

このように「奥州胆沢高山実伝」の著作年代も筆書年代も不明であるが、既に古くは「奥羽観跡聞老志」〔佐久間義和著、享保4年(1719)自序、仙台叢書所収上431頁心月寺条〕や「封内名蹟志」〔佐藤信要著、寛保元年(1741)高橋以敬の序あり、仙台叢書第8巻367頁〕、「仙台封内風土記」〔田辺希文著、明和9年(1770)自序、明治26年和装本仙台叢書第4巻894頁〕、「安永5年(1776)7月上胆沢郡上幅村風土記御用書出」(佐倉河石川彦次郎氏所蔵)等にもみえているので、掃部長者伝説はかなり早くから著名な伝承であつたことが知られるのである。

しかるに、今次敗戦後は格別の注目をひくこともなく、例えば「日本伝説名彙」(昭和25年)・「民俗学辞典」(同26年)・「日本社会民俗辞典」(同27年)・「綜合日本民俗語彙」(同31年)等に洩れ、学界の関心から遠のいたかのようにみうけられる。ごく最近、「みちのくの長者たち」(日本の民話別巻2、昭和32年)のうちに「嘉門長者」として収められている程度である。

今回ことさらに掃部長者伝説遺跡をとりあげて発掘調査するようになったのは、伝承~~ゆかり~~の土地に頻しく多量の黒い米(焼米だと伝えられている)が出土し、しかも水田耕作によつて年々黒い米が散逸しているというので、今のうちに黒い米の出土遺跡の性格を調査しておかなければならない緊急に迫られたからである。

(2) 所伝の体系と要素との概略

「奥州胆沢高山実伝」にみえている長者伝説は長文にわたるので、叙述の体系に従つてその要点だけをあげると次の如くである。内容は15段からできている。

第1段 上幅高山に高山稻荷がある。これは「孝謙天皇の御宇天平勝宝庚寅の歳(2年、750)、鎮守判官大野朝臣横刀の御勸請にして胆沢宗宮と号し、素盞烏尊の御子倉稻魂命を祭」つたものであることをのべている。長者とは直接関係はない。長者の住地にある古社の縁起をのべたものである。

第2段 長者の家系は長龜彦の兄安日に始まり安部頼時、頼時の嫡男日井を経て「嘉門長者に至る迄、富貴榮華に暮し其名も高く高山殿と相唱へ、後深草院の御宇に当つて正元己未元年(1256)国中大飢饉」となり、長者は私穀を放出して窮民を救済したことをのべている。他の諸書には嘉門を掃部と書いているものが多い。

第3段 嘉門長者は慈悲深い人であつたが、妻は吝嗇邪慳であつた。夫婦の間には禪司房という長男があつた。禪司房は「気量発明慈悲心厚く、孝心深き殿にして数多の下部にも情を掛け、誰老人として殿を憎者有らざれば、母の意にや合ざりけん、良ともすれば実子なれ共殺害せんとなし謀る」。妻はそんな性格の女であつたので「水ひと飲のまばやと屋形を立出高山清水に近よれば」姿は大蛇に化していた。

第4段 蛇身に化した妻は夫である長者を殺害し屋敷に放火し止々井の大堤に身を隠した。「火にかかりたる殺物は物変り星移ると雖も今に朽せず土中に埋り、耕す鋤に浮み出、見る人坐に古を慕ふこそ哀なりける次第なり」。孝心あつた禪司房は父の葬礼を営み、霊を館の東に葬り「弘長2年大歳壬戌(1262)7月忌辰」という石碑を建て父母報恩謝徳のため出家する。

第5段 清和源氏の子孫右兵衛尉義実が「文応元年庚申(1260)の春陸奥国胆沢の郡司に補せられ」領民を愛した。彼に玉与の姫という娘があつた。

第6段 蛇身に化した妻女は良民を害すので郡司義実が討伐軍を差向けた。蛇身は「永く大堤の主として毎年8月15日己の刻には二八前後なる美女老人を牲に供ふなら人民を害すまじ」という。

第7段 弘安3年(1280)人身御供の番にあたつたのは郡司義実の部下寝牛の冠者の一人娘であつた。娘は虚空蔵菩薩の仏力により大難を免れることができた。

第8段 翌年の人身御供は郡司義実の娘玉与の姫であつた。義実は神慮により遠州小夜の中山の美女を代理に立てることにした。他の諸書には松浦姫としてある。

第9段 義実の使者大麻生左工門四郎は「遠州小夜の中山大鹿の長者愛宕の庄司が館」にいたり貧家の小夜姫というものを見出す。

第10段 小夜姫は「東の果なる胆沢の郡司といへる方へ代金1500両を手を受け当壺ヶ年身を沈める」旨を母に申して出発する。これでは人身御供というよりも身売りである。この点が注意をひく。

第11段 義実の館に着いた小夜姫を「毎日種々揚弓・雀小弓や歌や琴・詩歌・碁将棋・雙六と替る替る饗応ば、何知らざるは無かりける、世の尋常ならぬ姫君と皆人毎に感じあへり」。人身御供の当日、村人は小夜姫を「涙ながらに化粧の場所に送りける。爰にて小夜姫うがい行水けはいを直し、爰は如何なる所ぞと問玉ふ。郡司答ふるに牲に上る姫達の化粧の場所と言」つた。ここには遊女の芸能と巫女化粧水伝説の残痕とが認められる。

第12段 小夜姫の信心により蛇身は「角欠、牙落惣身解るが如くに」倒れた。「土人其骨角を拾ひ大堤の北の傍に埋め大塚を築き今に其所を蝮蛇塚とも大塚とも申けり」。蛇身の住んだ「大堤は今堤にあらね共堤といへる其名残り、渴岸諏訪明神の小祠あり」。

第13段 神明の加護により危難を免れた小夜姫は5間4面の堂を化粧の場所に建立し湯岸薬師とした。

第14段 小夜姫は止々井の里で剃髪し比丘尼の姿となり贈物をうけて故郷に帰る

第15段 長者の長男禪司房は都に上り修業、名を素心と改め帰国し稻荷山禪正寺を開いた。その後寺は廃絶したので「慶長2丁酉年2月大梅拈華山門通正法寺の法嗣深窓田茂禪師再興して稻荷山心月寺と改め、禪宗曹洞派の道場とぞ成れり」。

以上が伝説の体系と要点であるが、これには伝説の諸型式と寺社の縁起譚(1段・12段・13段・15段)とが巧みにとりいれられて一つのドラマ的語り物に仕上げられている。しかし、この伝承の根幹をなしているのは長者伝説(2段)であり長者没落伝説(3段)であることは明白である。これらを中軸にして、女身が蛇体に変化する道成寺伝説(3段)、焼米が出土するという白米城伝説(4段)、人身御供伝説(6段)、神仏靈驗譚(7段)、人買い伝説(9段・10段)、巫女乃至遊女巡歴譚(10段・11段)、化粧水伝説(11段)等の要素が、5段・8段・14段を物語りのつなぎにして一体の語り物に仕上げられている。

高山掃部長者伝説だけが、このように複雑化しているのではなく、一般に長者伝説は以上にあげた諸要素のほかに埋金伝説・城跡伝説・金雞伝説、まれには沈鐘伝説などをも綴合吸収して、物語りの筋が面白くてきているものほど複雑な形をとりがちである。

このような性格をもつ伝説が、この地に定着すると、既にあげておいた近世の郷土関係の諸書は長者の宅跡は村のどの場所であり、墓は村のとこにあり、長者夫妻の常用した食盤は何寺に今も残っているのがそうであるというように、具体化されてくる。或はこれとは逆に伝説が具体化され、村のどの場所がその遺跡であり、何処の遺物が伝説ゆかりのものであるといわれるようになって伝説が特定の村に定着するようになるのかも知れない。

著作年代の明らかな文献のうちで現在のところ最も年代の古い奥州観跡聞老志についてみるならば、上葉場村(板橋言、上幅にも作る)心月寺にある「方1尺2寸朱内黒外金縁」は長者夫婦の食盤であり、妻女が蛇身に化した「鱗牙2片」も所蔵されているし、蛇身の住んだ池も北葉場にあり「土人これを蛟蛇湖と」いい伝えているし、都鳥村の四柱址は小夜姫が人身御供になった際の「設架地」である等と記してある。これらのことは、その当時、土地の伝承を忠実に記録したものである。しかし、聞老志の著者は伊達藩の学者であつたから、伝承は伝承として忠実に採録したが、伝承の内容に対しては批判することを忘れてはいない¹⁾。

聞老志から約20年後にできた封内名蹟志は、聞老志の漢文を和文に書き下した程度のものであるが、やはりその末尾には「此事信ずるに足らずといへども、土俗相伝へし事実故、爰に記して男女の覧に備ふ」と書き添えてある。

封内各蹟志から約30年後の仙台封内風土記になると、その南下葉場邑湊岸薬師堂の条において、高山長者の年代を「欽明帝御宇」のことに記し、佐夜姫は「肥前国松浦里」のものであるとして有名な松浦佐夜姫に附会しているのみならず、佐夜姫が大蛇の危難を免がれるために建立祈願した堂宇について「造立方7間薬師堂、其後荒敗、今其礎石埋在土中」というように、まことしやかに記すようになっていく。

封内風土記より6年後の安永風土記書出になると、さらに一段と具体的になり「高山掃部長者屋敷跡、南北85間、東西172間」とみえている。このように時代が降るにしたがつて、伝承が土地に即して具体化され、定着化が進むことは、伝承によくみられる一般的な傾向である。高山掃部長者伝説も、この点においては全く同一傾向をとっている。

II 焼米出土地

高山掃部長者伝説地から黒い米が多量に出土することは既述しておいた如くである。黒い

1) 仙台叢書本、上巻432頁。

米は焼米であると土地では言っている。伝説の体系からいえば、長者伝説が真実であるのだという裏付けとして焼米出土のことがのべられる形になっているが、実は焼米が多量に出土する事実を説明し解釈するために長者伝説がいろいろの伝説要素を組みこんで成立したのではないか。そうであるとするならば、焼米が出土するということが重要なモメントなのである。

焼米が出土するということは卒爾の間に管見に入つたものだけでも約20例をあげることができる。

番号	地 名	伝 承	文 献
1	宮城県王造郡名生村名生城	兵 火 館 跡	奥羽観蹟聞老志, 8の327頁
2	埼玉県比企郡西吉見村大字黒岩の観音堂附近	城 跡	郷土研究4の3
3	千葉の猪鼻台	兵 火 跡	同 上
4	千葉県夷隅郡国吉町大字万木	兵 火 跡	同 上
5	山梨県新府の城跡	城 跡	同 上
6	静岡県黄瀬川の鶴龜観音	長者屋敷跡	同 上
7	登呂遺跡 (焼米ではなく炭化した黒い米であるという。)	古代住居跡	登呂93頁
8	長野県北佐久郡岩村田町城跡	兵 火 城 跡	郷土研究4の3
9	長野県埴科郡尼殿城跡	兵 火 城 跡	同 上
10	長野県上伊那郡箕輪郷の富田の米塚	万福長者屋敷跡	同 上
11	岐阜県恵那郡中津町大字中津字恵下の徳の城跡	城 跡	同 上
12	愛知県丹羽郡西成村長久塚	甕 棺 出 土 遺 跡	森本六爾, 日本農耕文化の起源
13	奈良県信貴山の米の尾	兵火跡, 高安城税倉か	{ 郷土研究4の3 { 続日本紀研究6の6
14	兵庫県城崎郡豊岡町から1里の地	兵 火 跡	郷土研究4の3
15	鳥取県西伯郡御来屋町名和神社	蚕長者屋敷跡	民族と歴史7の1
16	伯耆国汗入郡名和庄名和耆守長年の宅跡	兵 火 跡	郷土研究4の3
17	島根県八束郡大庭村字長者原	{ 馬長者屋敷跡 { 黒田 駅 家 跡	{ 民族と歴史7の1 { 郷土研究1の1
18	福岡県筑紫郡大野村岩屋城跡	城 跡	郷土研究4の3
19	福岡県朝座郡宮野村大字宮野	八並長者屋敷跡	同 上
20	福岡県八女郡長峯村岩崎	彌生式時代の堅穴住居	考古学雑誌14の1
21	福岡県筑紫郡那珂村竹下	彌生式時代の遺跡	同 上 10の11

前掲表のうちには焼米でわなくて、湿潤高压の地下で澱粉質が炭化作用によつて永年のうちに黒色化したものも含まれているのかも知れないが、前掲表によつても知られるように、焼米出土地は弥生時代の堅穴住居跡か、兵火もしくは火災にかかつた城塞跡か、長者屋敷跡か古代駅家跡かという4類に帰着する。ただし、そのいうところは、堅穴住居を除くと発掘調査をした成果ではなく、すべて口碑所伝か推定論たるにとどまつているのであるから、もとより確実な所説とはみなしがたいのである。しかし、兵火火災城跡や屋敷跡から焼米が出土するということは、いかにもありうべきことである。とはいふものの、焼米出土地の性格を、すべて以上にあげた4類のうちに限定してよいものであろうか。

この点に関して新見解を提唱したのは中川長昌氏であろう。氏は「苗代田植の時の神祭りには、

供物の1つ」として焼米をささげる古い農事習俗があつたのではないかと想定しその理由として「焼米は恐くは此穀物の最も古い調理法であつた。古い故に即ち神には焼いて差上げることであつたのであらう」¹⁾とのべている。炊事用のコシキ土器が発見されている今日では、焼米が最も古い調理法であるとはいえないが、調理法としては古いものであらう。中川氏の想定を裏づけるがごとくに福島県石城郡の農事習俗として春耕時神々に「種粳を供へて祭り、又ヤツコメ(焼米)を上げる」²⁾ことがあり、千葉県君津郡の春耕時農事習俗にも焼米を供へる」ことがあつた³⁾。最近、板橋倫行氏は各種の文献を駆使して、天子の供御にも焼米が用いられたほかに、平安時代の一般食にも用いられていたこと、さらに鎌倉時代にもこの慣行のあつたらしいことなどを論証され「なほ各地の城跡から出土する焼米はたいがい一様に落城のときの火災に焼けたもののやうに伝へてゐるが、実は初から焼米として貯へられてゐたのに外ならなかつたのではあるまいか」と結んでおられる⁴⁾。

このようにみえてくると、焼米出土遺跡の性格はまことに多岐にわたるといわざるをえないのである。焼米出土遺跡の性格の複雑さは単に以上にとどまらない。長者屋敷跡といつても、長者そのものがまた複雑な意味をもっているからである。項をあらためて、この点につき摘記してみることにする。

III 長者と長者屋敷

長者伝説は物語りの重点のおき方からみると、発生譚と没落譚とに大別できるであらう。例えば金屋鏝物師のごとき歩き筋的渡り職人が諸国を遍歴する際に運搬した話が各地に定着して、各地特有の紛飾をこらして伝説化した炭焼小五郎長者伝説や芋掘長者伝説のごときは主として発生譚の範疇に入るものであらうし⁵⁾、このほか平清盛が蓮台野に狩した際に狐を助けてから栄達したという動物報恩譚や⁶⁾、毘沙門信心のあつた越前の伊良縁の世恒が無限の米を得て長者となつた因果応報譚⁷⁾なども発生譚の範疇である。没落譚はすべて因果応報譚のケースをとつていくが詳しくみていくと、黄金の扇で入り日を招き返すまでに増長したために没落したという増長没落譚、田植に早乙女を酷使したので没落したという酷使没落譚、もう一つは鏡餅を弓の的がわりにしたとか薪代りに米穀を燃したとかいうような贅沢浪費没落譚などがある。

しかし、ここで問題にしてみたいのは、どの長者伝説にも共通していることであるが、その語りものの裏づけとして、その長者のおつた屋敷跡は村のうちの此所である、といつておるその長者屋敷跡のことである。

長者屋敷跡のうちには、民俗学のいうごとく巫女遊女の類や歩き筋的渡り職人が語りものの文芸として長者物語を各地に伝えたために、長者伝説が各地に定着するようになり、定着した長者伝説を裏づけるために後になつてから仮托されたような屋敷跡も多数あるのであらう。しかしまた、接穂と台木の関係のように、長者物語が接穂として他から持ちきたられた土地に長者伝説をいかにも実際にこの村にあつたもののごとくに人々に思いこませるに都合のよい屋敷跡が先在していたとか、焼米が多量に出土する事実があつたとすれば、これらの具体的条件が接穂に対する台木のような機能を果たすることになり、長者伝説がいよいよ活き活きと定着もし成長もとげることになる。このような台木にあたるもの、即ち長者伝説の定着成立を支えた先在的長者屋敷にはどんなものがあつ

1) 中川長昌, 白米城の話, 郷土研究4の3
 なお、白米城の伝説については柳田国男氏の「伝説」(岩波新書)115頁以下に要約してのべられている。
 2) 民族, 1の4, 749頁, 大正13年5月。
 3) 民族, 2の4, 193頁, 昭和2年5月。
 4) 板橋倫行, 遺跡から出る焼米, 日本歴史 118号,

昭和33年4月号。
 5) 柳田国男, 炭焼小五郎が事, 海南小記所収。
 小野武夫博士, 万の長者一代記, 日本村落史概説所収。
 6) 源平盛衰記, 以卷第1, 清盛大威徳の法を行ふ条
 7) 宇治拾遺物語, 卷第15 伊良縁の世恒毘沙門御下文の事条。

たのか。この点に関連して、長者そのものについて一覧しておくことにする。

長者伝説の長者というのは経済的富有者であるが、もともと長者には氏の上＝氏宗という意味もある。宗中の長者とか氏の長者というのがそれである¹⁾。近江の竹生島の蓮華長者などは単に年々の祭の頭屋のことであったが、これもまた家長族長と同じ由来のものと思われる。仙台地方で四間通りの間仕切りのまんなかにある柱を長者柱と呼んだという²⁾。埼玉県秩父郡でも、デいの座敷との間の柱が長者柱だという³⁾。

長者という言葉は技術に長じた者という意味にもつかわれたことがあった。養老の職員令において陰陽寮の守辰丁の任用基準に関し「則此中取長者」と集解朱言にみえているからである。

次に拾芥抄巻中末綱所条に「寺務、検校、別当、座主、長者等寺によりて不同」とあり、寺院の貫主を叡山延暦寺では座主といい、園城寺では長吏、高野山では検校、禪寺では長老、南都諸大寺及び京都法勝寺等の六勝寺では別当というが、東寺では長者といつた。明治以後一時真言宗でも貫首を長者といつたことがあるという。東寺長者は承和3年5月権律師実恵がこれに補せられたのが始めて、帝王編年記や東寺長者補任等に空海を初例の如く記してあるのはいずれも追記である。東寺の長者については帝王編年記12や観応3年5月東寺高僧杲宝の著した東宝記(続々群書類従、宗教部)・東寺長者次第(続群補任部)・東寺長者拜堂記(同上釈家部)・東寺長者補任(群類補任部及び続々群書類第2冊史伝部)等に詳述してある。東寺長者は長者屋敷跡と直接の関係はいが、長者という言葉の意味は決して単一なものでないことを理解するのには役立つので一言しておく次第である。

第4に郷長か宿駅の長かを長者といつた時期もある。吾妻鏡弘長元年2月26日条に、

「一長者事

百姓等有其煩、一向被止之處、鎌倉祇候之御家人等、還又可有其愁、自今以後、宛給日食、可召仕之矣」

とある。前後の文意が明確でないで、長者とは郷長とも解されるしまた宿駅の長とも考えられ断定するわけにはいかないが、関白近衛政家(1444～1505)の日記後法興院記(後法興院政家記ともいう)の応仁2年4月8日条にも

「是日平等院鎮守離宮祭也、神輿3基、次社官4人馬上、次禪長者布衣馬上、次宇治長者、布衣馬上也」

とあるという⁴⁾。濱も宇治もともに離宮社氏子の郷であるというから、この場合の長者は郷長のことである。山城国乙訓郡山崎の宝積当所蔵文書正嘉元年10月10日付の寄進文書紛失状には6人の長者の署名があり、また同地正田竹次郎氏所蔵元徳2年8月24日付手継文書紛失状には4人の長者が

1) 大宝令の氏上、養老令の氏宗というのは氏長者のことである。そのことは、養老の繼嗣令に「凡三位以上繼嗣者、皆嫡相承(中略)其氏宗聽勅」とあり、この条の集解には「古記云、但氏上者聽勅、謂諸氏上者、必勅定給、下論嫡庶」とみえているので明らかであり、また養老の喪葬令に「凡三位以上及別祖氏宗並得營墓、以外不合」とあり、この条の集解にはやはり「古記云、別祖謂本同族、今別姓也、假令、藤原内大臣・橘右大臣之類、始別一身也(中略)氏上謂氏別氏上也」とあるのはいよいよ明らかである。そして、ここにみえている氏上とか氏宗というのは、戸令集解に「或云、繼嗣令云、氏宗聽勅、假令、諸氏氏別以其中長者、勅定為氏宗故」とみえているので、氏長者のことである。日本後紀延暦18年12月条の「宗中長者と」というのは、支那の古典の「

長者と約して後るるは礼にあらず」「長者のために枝を抑る」「寛厚の長者」のごとく年長者という意味にもとれるが、やはり勅書なるが故に氏長者というべきところを宗中と表現したものであろう。というわけは、類聚国史40采女条によれば大同元年10月勅のうちに「氏之長者」「長者」とみえ、同文のことが類聚三代格所収大同元年10月13日格・政事要略第59・後宮職員令第18条集解等にもでていているからである。以上の如く、長者には氏長者という意味があったのである。

2) 方言2の12。

3) 綜合日本民俗語彙2の931頁。

4) 喜田貞吉博士、郷里の長と長者屋敷、民族と歴史7の11。

連署してあるという。連署の部分だけを摘記すると前者には

長者 散位 一志則友（花押）
 長者兼大行事散位清原（花押）
 長者□ 守 □ □（花押）
 長者左馬允 清原（花押）
 長者左近将監 菅原（花押）
 長者 清 原 宗 時（花押）

とあり、後者には

長者 内 藏 則 高（花押）
 長者左工門尉清原時代（花押）
 長者左工門尉佐伯友高（花押）
 長者執行大夫清原時次（花押）

とあり共に清原姓が重出しているので、長者とは氏の長者でないことは明白である。郷長か宿駅の長かであろう。

律令時代の駅家制が崩壊してから駅家の機能を継承したのが宿駅であるが、律令時代の駅家の跡を長者屋敷といつたらしいという見解を吉田東伍博士は大日本地名辞書において、大槻文彦博士は復軒雜纂において早くからのべておられる。その当否は発掘調査によつて明確にされなければならないが、それはさておいて両先学は筑前国朝倉郡長者町を隈崎駅、出雲国八束郡大庭村の長者屋敷を黒田駅、陸前国栗原郡富量村長者屋敷を栗原駅の跡とみないている。長者屋敷跡から駅家を想定するにいたつた根拠は「長者とは駅長の俗称なれば」（大日本地名辞書4192頁）であつた。駅家の長を駅長と称したことは庶牧令凡駅各置長一人条や賦役令凡舍人条等によつて明らかであるが、果して駅長を長者と俗称したのであつたかという点になると今のところ管見には入らぬので俄に断言しがたい。しかし、先学の言として一応考慮しつつ発掘がなされるのが慎重な態度であろう。

第5に市守長者がある。市守長者は大和東大寺の南や丹波にあり、伊賀名張町には市守宮があり、常陸水戸の西鑄塚村では一盛（いちもり）長者となつていいるという。「要するに市守長者はもと市の長者で必ずしも富豪の意味の長者ではなかつたであろうが、其の中には大富豪も起つたであろうし、そうでなくても其の長者址とか長者屋敷とかいふことから、例の長者伝説が纏綿して、諸所に市守長者の伝説を生じたものであろう」¹⁾。そうであるとするならば、長者屋敷伝説地の発掘には地域交易圏における市ということも考慮しつつなされる必要がある。ただし駅家乃至宿駅という交通要所と、地域交易圏における市とは不可分の関係にあるので、発掘は至難をきわめるであろうし、且つ広汎な文献の裏づけを必要とする。

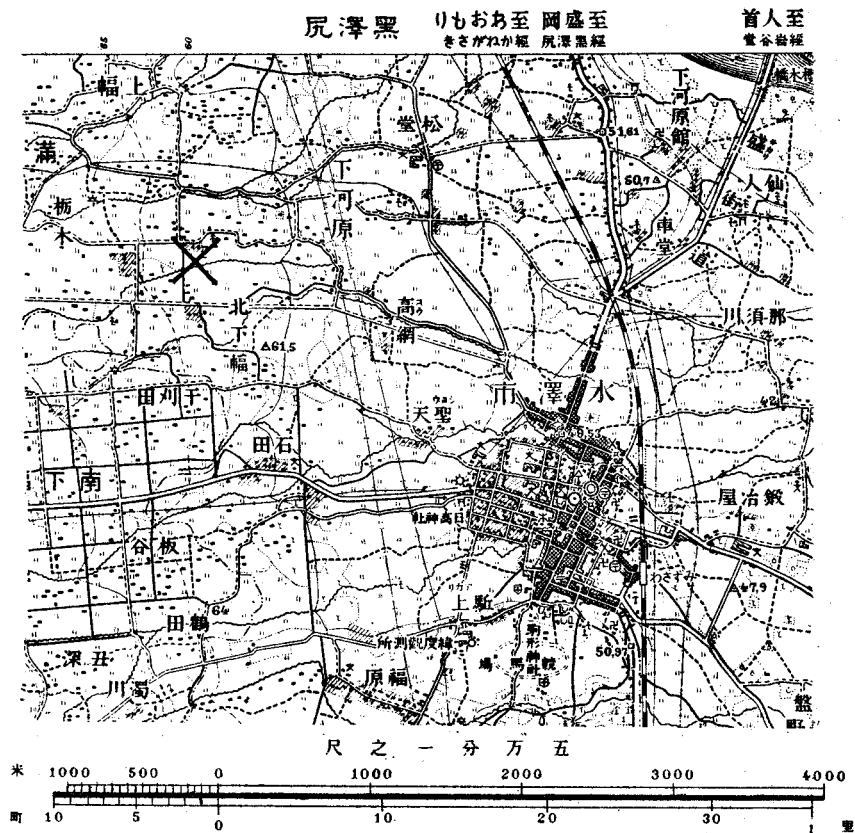
第6は宿の遊君である。宿駅の遊君に長者とよばれるものがあつたことは柳田国男氏の既に早くから指摘するところである。多分、その仲間の一藩に限つて長者といつたのであろうが、長者屋敷とか長者池といわれるもののうちには、こういつたものから名を得た土地もありそうである。遊君の主な職分には長者伝説に類するような物語りを語り歩くことも含まれていたのであるから、遊君の長者と遊君の語る長者伝説とが混同されることも起り一層長者伝説と長者屋敷説話の普及を助長したであろう。

焼米の多量に出土する長者屋敷伝説遺跡は、既述したごとく、駅家か宿駅・城の建物跡・古い市（いち）に関係ある建物跡など多種多様にわたり、しかもそれらの判別決定となると現在のところでは識別基準が全くないのである。多難を予想しつつも実施せざるをえない緊急に迫られて今次発掘となつたのである。

1) 喜田貞吉博士、市守長者に就いて。

IV 遺 跡 の 位 置

遺跡の位置は5万分地形図水沢図幅についていうならば、岩手県水沢市街部中央からみて西北方約3キロ地点である(第1図)。市役所の台帳によれば次表のごとくである。



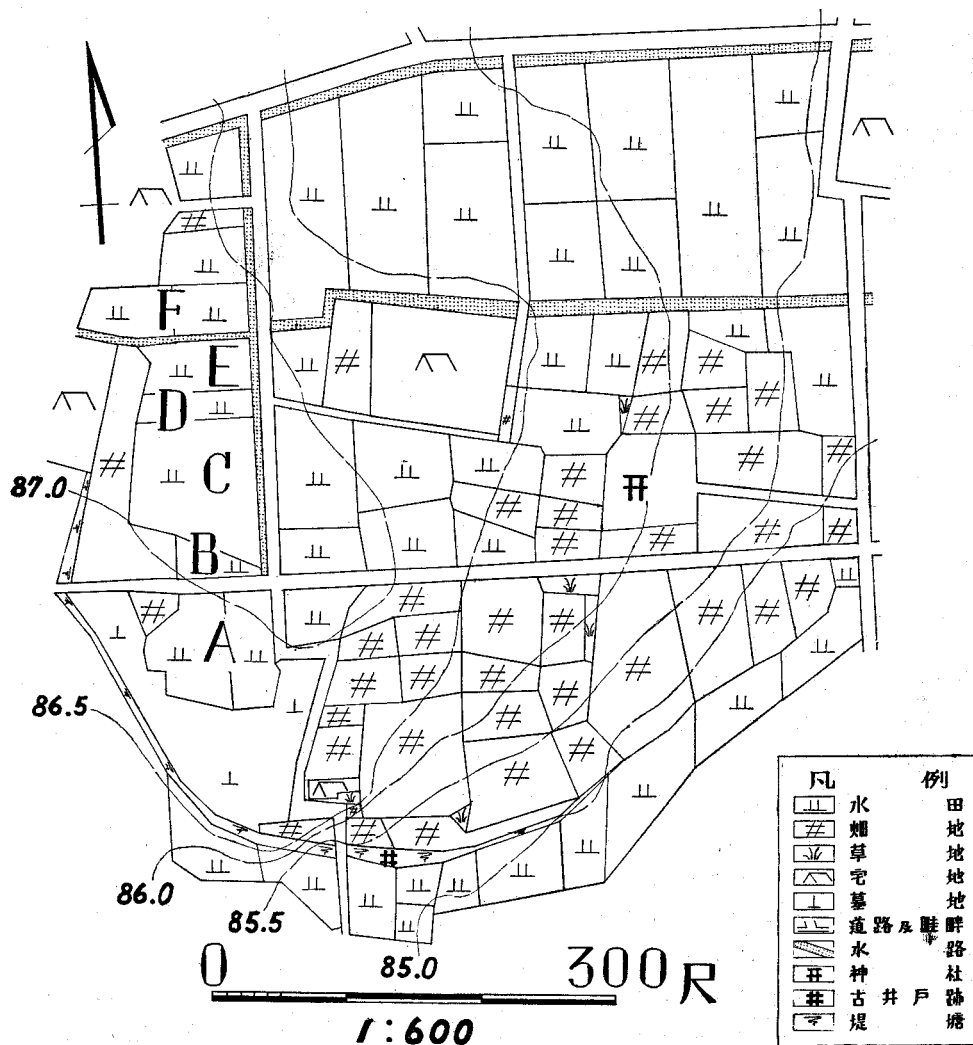
第1図 5万分地形図(水沢図幅) ×印は焼米土地を示す。

地 番	地 目	面 積	所 有 者
水沢市佐倉河西高山 60番地	畑	2.10 畝 歩	掃 部 三 五 郎
" 96 "	水 田	2.10	高 橋 梅 治
" 98 "	"	3.26	"
" 99 "	"	2.10	"
" 119 "	畑	1.24	小 野 寺 昌
" 120 "	{ 水 田	2.20	{ 高 小 野 寺 梅 昌 治 昌 彦
" 121 "		1.22	
" 124 "	"	14.13	渡 辺 武 彦
" 125 "	"	4.25	小 野 寺 万 治 郎
"	"	2.01	"
計		38.71	

即ち3段8畝11歩が、土地の人々の伝承している遺跡の面積であるが、今まで発掘調査がされたことがないので、もとより正確とはみなしがたい。現状地形からみると、3町歩から4町歩位の周辺地域が調査の対象になるのではないと思われる。

この遺跡は鎮守府胆沢城跡や¹⁾、本県において弥生式土器を出土したので一躍学界に著名となつた常盤遺跡²⁾に近いので、黒い米を多量に出土する本遺跡の性格はなんであるか、一部からは関心をよせられていたのである。胆沢城跡からみると、直線距離にして西南方約3キロ、常盤遺跡からみると西方約4キロにあたつてゐる。

遺跡地は現在一帯の水田となつており、南部には畑地・草生地・心月庵墓地があり、東南部に高山稻荷神社が存在し、民家6戸が点在している平坦地である。しかし微地形的にみると、実は南面した舌状台地であつて、南方と東方と西方の三面は低地に臨んでいる。このうち東方と西方とは緩



第2図 遺跡近傍実側図

1) 斎藤忠・田中喜多美・板橋源、胆沢城跡、昭和32年3月、吉川弘文館。

2) 伊東信雄、岩手県佐倉河発見の彌生式遺跡、古代学 3の2、昭和29年。

傾斜をなして低地に臨んでいるが、南方は明確な崖線をなし2メートル内外の比高を示している(第2図)。広大な胆沢平野全体からみると、この高山地区は生活立地条件上卓越した好適地であり、現在でこそ草叢が繁茂してみるかげもなくなっているが、南部崖線下には泉の痕跡もあり、50歳位の人ならばこの泉から水が湧いていたのを大抵知っている。ただし古老たちの話によれば、飲料とした記憶はなく、「おはぐろ水」と称していたという。黒い水であつたからだと説明している。

V 調査の経過

第1節第1項において述べておいたような所伝が早くより諸書にみえており、且つ黒い米が多量に出土し著名な遺跡であるので、しかも黒い米の出土する地域は水田となつているため、毎年春耕時には散逸するので、遺跡の性格を究明しておくことの緊要性が痛感され今回の発掘調査となつたのである。調査は次の如き要項によつてなされた。

1 調査の主体	水沢市教育委員会		
2 調査の期日	昭和33年10月21日より同25日までの5日間		
3 調査員	岩手大学教授 県文化財専門委員	板橋	源
	水沢市教育委員	花山	寛美
測量	水沢市教育委員会	佐藤	忠
庶務	同上	及川	和彦
補助員	岩手大学板橋研究室員	佐々木	博康
	同 卒業生	菅原	郁雄
	同 学生	近藤	宗光
	同 同	小林	貢
	同 同	高橋	政吉

その他に小野寺西松・小野寺昌両氏や地元第6区青年会多数の方々の好意ある援助をうけた。

10月21日 曇 午前8時12分盛岡発の列車で現地にいたる。午前中、花山寛美氏宅において地元側と打合せをとげ午後より作業開始。前日の降雨により水田一帯に湛水しているので先ず排水作業をなす。その後、心月庵墓地の北側に隣接する水田に幅5尺のトレンチを2本、ほぼ南北にいれる(第2図A地区)。黒い米の出土する地点を数カ所発見。但しその附近には建物の存在を示すような痕跡は全く認められない。即ち掘立式柱脚や打込式柱脚の痕跡は勿論のこと礎石も、礎石の存在を証明する根石も、それから根石が嘗て存在していたという痕跡すらも全く認められなかつた。小野寺昌・小野寺西松・小野寺萬治郎3氏のほか青年会員4名来援。花山寛美氏宅に宿泊。

22日 午前曇午後時雨 昨日のトレンチに平行して更に東方において幅3尺のトレンチを2本いれる(第2図A地区)。午後、昨日のトレンチの西方にも幅3尺のトレンチをいれる(第2図A地区)。現状地形 600分の平板測量着手。小野寺西松・小野寺萬治郎両氏と青年会員5名来援。

23日 曇後時々晴 調査予定全地域に長大なトレンチをいれようという当初の計画は人員の関係から実施不可能なことがわかつたので、計画を変更し、初日以来調査していたA水田から北へ向つてB・Cの水田2枚を除外し、更に北にある3枚目即ちD水田と、これに北隣するE・Fの水田を調査することとなる。D水田において黒い米の出土地点3カ所、E水田において4カ所、F水田において1カ所発見する。ただしA水田の場合と同様に建物跡の痕跡は全く認めることができなかつ

た。D水田の黒い米出地点において黄瀬戸系統かと考えられる陶土器破片を、そして附近の畑地から皇宋通宝1個を発見。600分の平板測量終了。青年会員は午前3名。午後6名。夕刻、水沢市及川録郎教育長・同小笠原功課長等来訪。

24日 快晴 前日までに発見した黒い米出土地点のセクションをつくり精査。600分の測図のほかに100分の平板測量をなす。青年会員6名。水沢市及川教育長・北上市司東真雄教育委員・水沢市医師斎藤富太郎氏・胆沢平野土地改良区安倍卯平常務理事・同佐々木盛総務課長・佐倉河農協及川長松組合長の諸氏来訪。

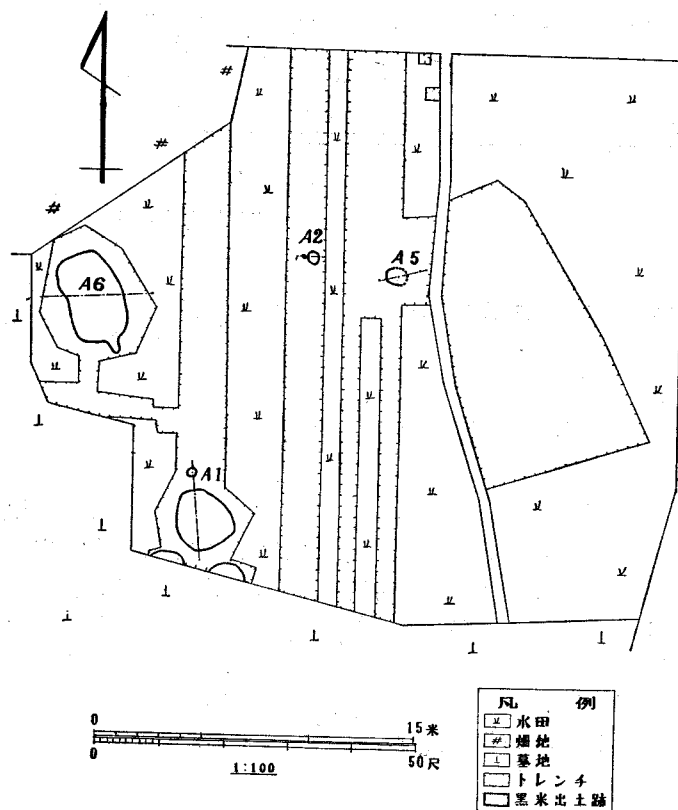
25日 曇 午前中前日の作業を継続。午後埋戻し作業。午後4時50分の汽車で帰盛。

VI 調査の成果

従来、所謂「焼米」と称されるものを多量に出土する遺跡に関しては、弥生式時代もしくはそれ以降の竪穴住居跡、兵火か火災にかかった城跡か館跡、古代駅家か宿駅の跡、長者と称されるものの屋敷跡、春耕時に豊穰を祈請した農事習俗の跡等の諸説があり、そして本遺跡については掃部長者屋敷跡説と胆沢城関係の倉庫跡説とがあつた

さて、今回は調査予定地域(第2図)を全面的に調査する余裕がなかつたので、その約20分の1程度にもみえない小地域しか調査できなかった。したがって俄に断定しがたいのであるが、成果を要約すると次のごとくである。

- 1 建物の存在を証明する掘立式柱脚や打込式柱脚はもとよりのこと、それらの存在を認知できるような痕跡すら発見できなかった。

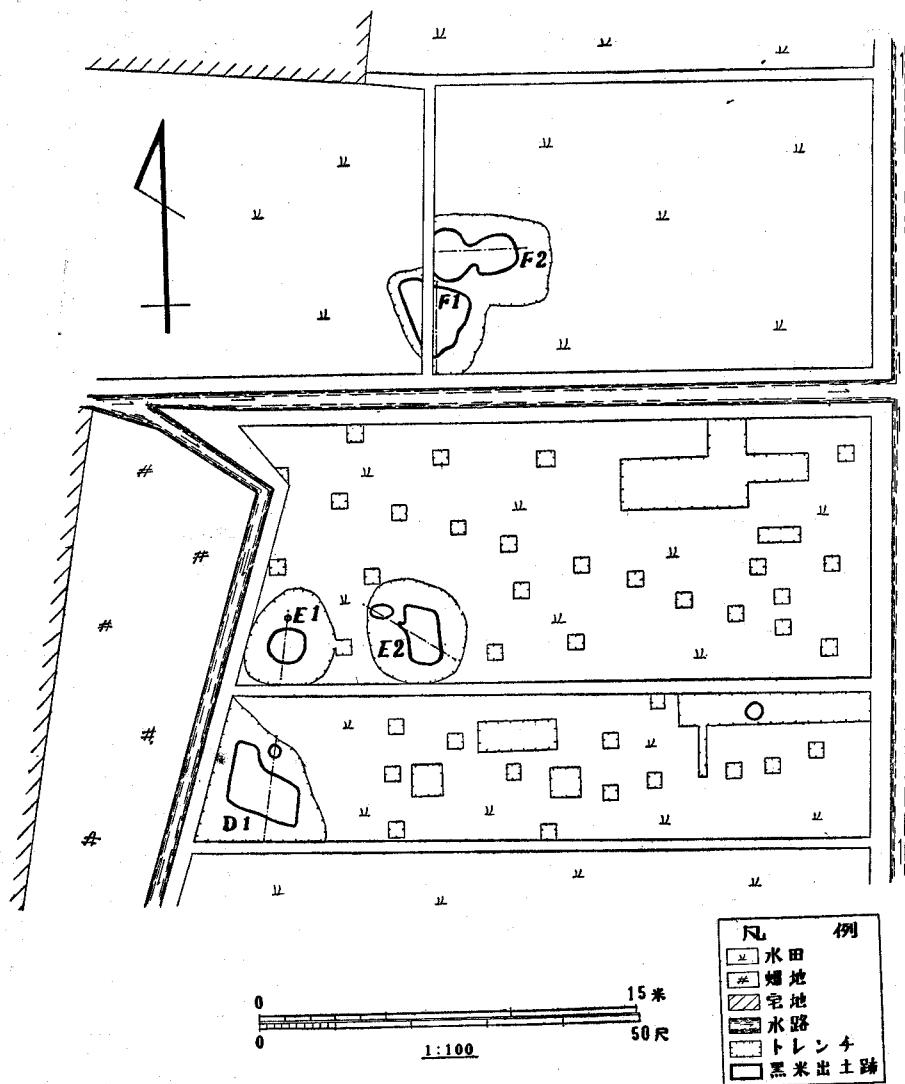


第3図 A 地区 実側図(100分ノ1)

- 2 建物の礎石も、礎石の存在を認知できるような根石も全く発見されなかつた。

- 3 しかるに土地に直接墳をうがち、その中に黒い米が多量に充填されてある個所が15カ所発見された(第3・4図)。その墳の形状や深さは大小さまざまであるが(第5図)、小墳の方が一般に大墳よりも深さにおいて深い。そして大墳傍に小墳が存在しあかかもワン・セットをなしているのではないと思われるものもある(第4図のD1・E1など)。

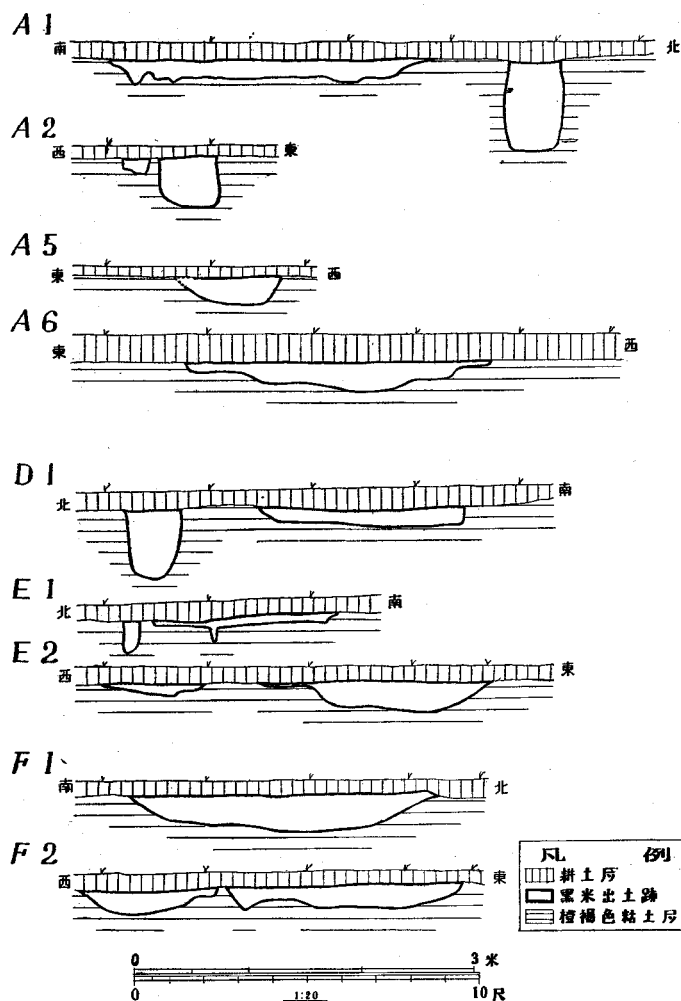
- 4 黒い米の充填している墳の断面図を作製するために、墳を掘つたら黒い米に混つて土師器破片(第3図A1より底部を含めて3片、同A5より11片、第4図D1より4片)。



第4図 D・E・F 地区実側図(100分ノ1)

須恵器破片(第3図A1より6片), 陶土器破片(第3図A1より2片, 第4図D1より14片)等が発見された。復元可能なものは全くない。このうち陶土器破片を東京博物館に時代鑑定を依頼した結果によれば, 「釉薬のある方は江戸中期から前には上らぬ。瀬戸系のものか。」とみられるものと, 「桃山乃至江戸初期位までのもの」とがあつた¹⁾。したがって, これら混入破片は, 黒い米の充填している壙をつくつた時のものとはみなしがたく, 遺跡地が水田化した際に混入したのであろう。そうであるから, この場所は水田になる以前土師・須恵の頃からかなり後まで何等かの遺跡であつたのである。皇宋通宝(初鑄年代は北宋の仁宗宝元2年, A・D1039)が発見されたこともその傍証となる。

1) 昭和33年11月15日, 陶土益を持参し東京博物館の辻本直男氏を通じて依頼した結果である。



第5図 焼米の充填していた土壌セクション

5 出土の黒い米は文部技官斎藤忠博士を通じて佐藤敏也氏に鑑定を依頼した結果によれば、全て焼米である（第6図）。「粒の間に胚目を有する焼板の小細片ならびに断面円い径3～10mmの樹木の小枝の焼けたものとが混じっている」。鑑定の結果を摘記すると次の如くである。

- a) 焼ぶくれがあり、米を蒸し焼きした場合に起る状態と同様に、網目状の気泡を生じている。この焼米は焼粳である。
- b) これは短粒の丸味ある整一性を有する稻粳である。
- c) 殻の付着していた数例の焼粳では稈先に短い稈毛を有し、切断された芒の状態から有芒の品種であることが推察される。
- d) 胴割れが一つもない。これは収穫後の乾燥調製が良く行われ、良好な管理下におかれていたことを意味する。
- e) 東北各地出土（古川市小

林莊嚴寺，秋田県仙北郡金沢町八幡神社本丸址，同仙北郡後三年館跡，栃木県那須郡荒川鴻ノ山長者平，福島県安達郡杉田村長者の宮）の焼米の長巾の様子を整理して，その相互の関係を検討した結果，おそらく佐倉河出土のこの焼米も東北産米であるにちがいない。

- f) 東北地方の弥生式土器文化に伴う米粒は，有芒短粒で丸味を帯びていることは宮城県柞形田出土のものが確実な例であり，東北の弥生式文化に伴う粳は一般に短粒丸形と見てさしつかえない。佐倉河の粳の時代は明瞭でないが，東北地方中世の一聯の焼粳も短粒丸形であり，更に福島県相馬郡に伝世された天明3年の粳を検するにやはり有芒短粒丸形であることと比較し，東北地方在来品種の水稻も短形丸形で有芒であることと思合せるとき，弥生式→古墳→中世→近世→近代へと東北の稲作は同じような系列の品種が古くからつくられていたのではあるまいかとの一応の考案も成立するようである。
- 6 以上のべてきた諸点からみると，本遺跡は胆沢城関係の倉庫跡，兵火館跡，古代駅家跡，長者

1) 佐藤敏也，水沢市佐倉河所在高山遺物包含地出土の焼米について，昭和34年3月，謄写版。

と称されるものの屋敷跡とはみとめがたく、全く新たな観点から、さらに広い地域にわたって発掘調査がなされて初めてその性格が明らかとなるべき学術上まことに稀有の遺跡であるといわねばならない。

—— 昭和34年11月10日 ——

第 1 図 版 説 明

- 第6図 焼米写真。佐藤敏也氏撮影提供による。
- 第7図 発掘現場写真。南（墓地）より北方に望む。近景はA地区、遠景はD・E・Fの三地区である。
- 第8図 A地区のA1焼米充填土塙写真。南より北方に望んだもの。
- 第9図 A地区のA6焼米充填土塙写真。南より北方に望んだもの。
- 第10図 D地区のD1焼米充填土塙写真の1。西より東方に望んだもの。向つて右は広くて浅い土塙、左は狭いが深い土塙。
- 第11図 D地区のD1焼米充填土塙写真の2。狭くて深い土塙の断面である。焼米粒がみえている。
- 第12図 出土品。

追 記 「民間伝承」24の1（昭和35年2月）に片山信光氏が「焼米の供物二つ——宮城県白石市深谷——」という報告を寄せられている。

